

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：13302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00010

研究課題名(和文) Cross-linguistic disagreement and its philosophical problems

研究課題名(英文) Cross-linguistic disagreement and its philosophical problems

研究代表者

水本 正晴 (Mizumoto, Masaharu)

北陸先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科・准教授

研究者番号：70451458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、交言語的食い違いという問題の存在を哲学において認識させ、それを一つの哲学的トピックとして認識させるということにあったと言える。そのために、1. 知識、know how、真理などについて、交言語的食い違いの(少なくともその可能性の)根拠となるデータ、2. 交言語的食い違いについての概念的整理、3. その可能性を否定する議論に対する一つの反論となる議論、を国際誌または国際的出版社からの書籍内で出版し、4. このトピックについての国際会議を開催し、それに基づく国際誌での特集号を組むことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上記の出版物および活動により、John MacFahlen, Jennifer Lackey, Annalisa Coliva といった有力な哲学者を巻き込み、哲学的トピックとしてのdisagreement(食い違い)において(特にAsian Journal of Philosophy誌上の特集号の後)哲学的に一定の注目を集めることができた。新たな哲学的トピックを確立することは容易なことではなく、数年でできることでもないが、少なくともそのための将来の議論のための基礎を提供できたと言える。この食い違いは、AIの翻訳に基づく会話においても現れるため、今後社会的に重要な問題となり得る。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to make the existence of the problem of cross-linguistic disagreement recognized in philosophy and to establish it as a philosophical topic. In order to achieve this, 1. data on the basis of (or at least the possibility of) the cross-linguistic disagreement with regard to knowledge, know how, truth, etc., 2. a conceptual analysis and explication of cross-linguistic disagreement, 3. an argument against the possible denial of its possibility, were published in international journals and anthologies from an international publishing houses, and 4. an international conference on the topic, was held and a special issue in an international journal based on it is now planned.

研究分野：分析哲学

キーワード：disagreement linguistic diversity epistemology truth condition philosophy of language

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、それまでの科研費プロジェクト、「知識の文化的・言語的差異と民間意味論に関する実験哲学的研究」(基盤 C、2011-2013)および「エスノ認識論とそれに基づくメタ認識論の探究」(基盤 C、2014-2018)において、知識概念の言語的差異とその認識論的帰結について研究してきたが、本研究においては、知識概念に限らず、哲学的概念の言語的多様性一般についての哲学的帰結を、「食い違い disagreement」についての研究の文脈から探究、議論することを目指していた。

### 2. 研究の目的

食い違いの研究においては、特に peer disagreement の文脈で、単純に一方に非があると言えない食い違い (faultless disagreement) があるのかどうか、およびもしそのようなものがあるならば、そうした食い違いの存在 (の認識) は、我々が自分自身の見解についての信念を撤回する、あるいは弱める理由となる、という立場 (Conciliationists) と、全くそのように信念を変える必要はないという立場 (Steadfasters) が対立してきた。両方の立場の中にもさらに様々な種類があるが、研究代表者自身の立場は Steadfast view を支持する立場であり、自分が P を固く信じているならば、知的な peer が同じ証拠をもとにして not-P と信じているならば、その事実を P を疑う理由ではなく、「なぜ彼女はそう思うのか」について探究する理由と動機を与えるものである、と考える。

この点、味覚や視覚経験の内容についての食い違い (例えば写真の中のドレスが青と黒に見えるか、白と金に見えるか) においては、すぐに「なぜ」の探究が尽きてしまうが、そのタイプの食い違いは「瑕疵のない食い違い faultless disagreement」としてお互いを認めることができるだろう。だが、哲学的問題についての見解の食い違いは、そのようなものでないとほとんどの哲学者が考えてきた。だからこそ、上記の二つの立場の食い違い (および様々な下位分類間の対立) が大きな議論を巻き起こしたのである。

だが、もし研究代表者が示してきたように、哲学的概念に言語的多様性があるのであれば、その結果として生じる食い違いについて、Conciliationist の立場によれば、英語圏で正しいとされてきた哲学的常識についても、広く見直しを迫られるということになるであろう。例えば (普遍的であることが逆に実験哲学で示されたが) ゲティア一例について、それを反例と認めない知識述語があったとすれば、英語圏の認識論は、知識の分析について一からやり直すべきということになるだろう。だが、上に述べた Steadfast view によれば、むしろそれは、その言語における知識述語をより詳しく探究する理由と動機を与えるものになる。

いずれにしても、そのような問題を論じるためには、まずは交言語的食い違い cross-linguistic disagreement 自体が可能であると示さねばならず、そのためには哲学的概念についての言語的 pluralism を説得的に示すと共に、そこで生じる判断の違いを真正は「食い違い」として擁護する必要がある。その上で、交言語的食い違いの様々な哲学的含意について、その哲学的価値と重要性を示すことで、この問題自体を現代哲学の中で新たにトピックとして確立するのが本研究の目的であった。

### 3. 研究の方法

まずは、上で述べた哲学的概念についての pluralism を説得的に示すことが必要であり、そのための交言語的な実験哲学的研究を行った。特に、哲学的概念の中でも特に重要なものとして、know how 概念と真理概念を中心に調査を行っている。

また、個人の論文だけでは新たな哲学的トピックとして認められることは難しいため、John MacFarlane、Jennifer Lackey、Annalisa Coliva などの著名な哲学者を招き、国際会議を開催した。

この国際会議で明らかになったのは、交言語的食い違いの可能性自身に懐疑的な哲学者が意外に多かったということであり、それはまた言語的 pluralism の可能性を否定する立場でもあるということにあまり自覚的でないことに気付いた。よって、言語的 pluralism と交言語的食い違いの関係を具体的に論じるとともに、交言語的食い違いを概念的に否定する根拠となっている真理条件的意味論について、その限界を明らかにすることをもって、交言語的食い違いの可能性を擁護するための方法論とした。

さらに、より一般的に、実験哲学的方法論自体の擁護、特に日常言語学派との関連からの、日常言語に埋め込まれた概念の経験的探究の正当化も本研究の基礎付けとして、方法論の一つに数えられる。

### 4. 研究成果

まず、哲学的概念の言語的 pluralism の証拠を提示するという目的については、次田瞬、和泉悠との共著 Knowing How and Two Knowledge Verbs in Japanese (2020) および Knowledge-How Attribution in English and Japanese (2022) は、know how 概念についての日本語と英語の体

系的違いを経験的に明らかにするものであった。これらはまだ英米の know how の研究者に言及されて真剣に受け取られていないように思われるが、まだ未出版のより決定的なデータを報告する論文もあり、それが出版された後は、英語圏の哲学者も次第に無視できなくなるであろう。また、Knowing How and Two Knowledge Verbs in Japanese が収録された論文集 *Ethno-Epistemology ~ New Directions for Global Epistemology*(2020)自体も、言語的 pluralism の可能性とその帰結を言語学的、哲学的に議論するものであり、このトピックに関する重要な貢献であると言える。

The plurality of KNOW: a response to Farese (2021)は言語学の雑誌に掲載された論文であり、研究代表者の2018年の知識述語に関する言語的 pluralism の論文を、言語学者に対して、命題的知識を捉える知識述語の使用についての哲学的関心を言語学者に対してもわかりやすく解説し、発展的な共同研究を呼びかけるものである。題名から分かるように、これは2018年の論文についての(論文の後半部分を完全に無視した)不当な批判に対する反論という形を取るが、同時にこれは命題的知識についての言語的 pluralism の補完的考察と言える。

A prolegomenon to the empirical cross linguistic study of truth (2022)は、こうした言語的 pluralism が真理概念にも当てはまる可能性を経験的に示した初の論文であると言える。この中では、日本語の「真である」と「本当である」が英語の true とが、そして広い意味での真理述語として「正しい」と correct が対比され、それらを使用した判断には、政治的・道徳的に問題のある文脈においてのみ、大きな差異が生じることが報告されている。だが、それだけでなく、論文の前半部分では、真理述語の言語的 pluralism の可能性についての概念的・問題と経験的データの解釈の問題が整理され、それが決して概念的に不可能ではないことが詳しく論じられている。真理概念は、哲学者にとって言語的 pluralism が最も受け入れがたいと思われる哲学的概念であるため、この考察は、(以下に見るように)他のトピックにおいても将来重要となると考えられる。

例えば、すでに述べたように、交言語的食い違いの可能性についての概念的・不可能性の議論は、真理条件意味論を前提する。だが、真理概念自体に言語的 pluralism が成立するならば、一つの命題に対し、異なる真理条件があることにさえ概念的な困難はなくなる。とはいえ、言語的 pluralism の場合、異なる言語によって捉えられた概念が異なると同時に「同じ」知識概念、真理概念、etc. である必要があり、真理条件意味論を前提する限り、それにより真理値が食い違う可能性はあり得ない。The argument from accidental truth against deflationism (2022)は、真理論におけるデフレ主義と反デフレ主義の論争の文脈での純粋な概念的な研究であるが、それはまた、言明の内容の文脈依存性を認める限り、直観的な言明の内容と真理値にギャップがあることを示しており、それゆえに言明の内容は真理値から独立に特定されるということの証拠にもなっている。真理条件意味論に特化した論文は、別途執筆中であるが、この論文で提示された事例は、すでに真理条件意味論の直観的妥当性を疑うに十分なデータを提示していると言える。そしてもしそうであれば、言明の内容は、その真理条件から独立に議論することが可能なものであり、正しい翻訳であるという意味で同じ内容を持つ二つの文が異なる真理条件を持つことについて概念的困難は克服されたと言える。

また、Experimental Philosophy and Ordinary Language Philosophy (2023)は、ここまで前提してきた実験哲学的方法論自体の哲学的擁護であり、日常言語学派の哲学的方法論との関連から実験哲学のネガティブプログラムを、これまでの実験哲学のデータと共に正当化する議論を与えるものである。言語的 pluralism はどうしてもネガティブなものになる。「唯一の正しい理論」の放棄を意味しているように思われるからである。だからといって、日常言語が空独立に理論構築ができないし、するべきではないことは、まさに言語的多様性が示している。言語的直観から独立に哲学を行っているつもりでも、結局は強く哲学者自身のメタ言語が理論構築を大きく制約しているのである。しかしだからこそ、交言語的食い違いにおいて、なぜその言語の話者は、そのように言語を使用するのか(それゆえ、その異なる概念が埋め込まれた異なる生活形式)を探究する理由と動機を与えられることで、より生産的かつ経験的な哲学的探究が始まるべきなのである。

こうした研究は、交言語的食い違いそのものというよりは、それを論じるための基礎付けや予備研究というものになるが、コロナ禍で長らく延期になっていた Cross-Linguistic Disagreement 国際会議および同名のワークショップを Thomas Grundmann および Nikolaj Pedersen と協力しながら最終年度によやく実現することができ、その成果は Asian Journal of Philosophy の特集号として近々出版される予定である(現在の予定は、2023年12月)。その国際会議で発表され、その特集号で出版される予定の Global Assessment Relativity as a Consequence of Cross-Linguistic Disagreement は、John MacFarlane の assessment relativity を交言語的食い違いの文脈へと拡張、一般化するものである。MacFarlane の相対主義は、発話の真理値が、(文脈主義の主張するように)発話の文脈だけでなく、その評価 assessment の文脈にまで相対的であると主張することで、大きな論争を引き起こしてきた。しかし、もし言語的 pluralism に基づく交言語的食い違いが可能であれば、まったく同じ命題であっても、それを評価するメタ言語が異なることで、真理値が異なるということが可能となる。これが本当であれば、assessment relativity は、むしろありふれたものであるということになるはずである。これが交言語的食い違いの一つの大きな哲学的帰結である。この特定の主張が将来分析哲学において広く受け入れられるかどうかとは別に、MacFarlane, Lackey, Coliva を始

めとする著名な哲学者が寄稿予定であるこの特集号が出版されれば、交言語的食い違いというこの新たな哲学的トピックを切り開くという当初の目的は達成されたと言えるであろう。

#### References:

Masaharu Mizumoto (2023). *Experimental Philosophy and Ordinary Language Philosophy, Experimental Philosophy of Language*, Springer.

Masaharu Mizumoto (2022). A prolegomenon to the empirical cross-linguistic study of truth, *Theoria* 88(6) 1248-1273.

Masaharu Mizumoto (2022), The argument from accidental truth against deflationism, *Inquiry* 1-29.

Shun Tsugita, Yu Izumi, Masaharu Mizumoto (2022). Knowledge-How Attribution in English and Japanese) in *Knowers and knowledge in east-west philosophy: epistemology extended* Palgrave Macmillan 2022 年 (ISBN: 9783030793487)

Masaharu Mizumoto (2021). The plurality of KNOW: a response to Farese, *Language Sciences* 85 101369-101369.

Shane Ryan, Chienkuo Mi, Masaharu Mizumoto (2020). Testimony, Credit, and Blame: A Cross-Cultural Study of the Chicago Visitor Case, in *Ethno-Epistemology ~ New Directions for Global Epistemology* 94-113.

Masaharu Mizumoto, Shun Tsugita, Yu Izumi (2020). Knowing How and Two Knowledge Verbs in Japanese in *Ethno-Epistemology ~ New Directions for Global Epistemology* 43-76.

Masaharu Mizumoto, Jonardon Ganeri, Cliff Goddard (2020). *Ethno-Epistemology ~ New Directions for Global Epistemology*, Routledge.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 5件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Shun Tsugita, Yu Izumi, and Masaharu Mizumoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Knowledge-How Attribution in English and Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Knowers and Knowledge in East-West Philosophy: Epistemology Extended	6. 最初と最後の頁 63-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 SHANE RYAN, CHIENKUO MI, MASAHARU MIZUMOTO	4. 巻 NA
2. 論文標題 Testimony, Credit, and Blame: A Cross-Cultural Study of the Chicago Visitor Case	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ethno-Epistemology New Directions for Global Epistemology	6. 最初と最後の頁 94 - 113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 MASAHARU MIZUMOTO, SHUN TSUGITA, YU IZUMI	4. 巻 NA
2. 論文標題 Knowing How and Two Knowledge Verbs in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ethno-Epistemology New Directions for Global Epistemology	6. 最初と最後の頁 43 - 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Mizumoto Masaharu	4. 巻 NA
2. 論文標題 The plurality of KNOW: a response to farese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Language Sciences	6. 最初と最後の頁 101369 ~ 101369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.langsci.2021.101369	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mizumoto Masaharu	4. 巻 -
2. 論文標題 One More Twist ~ Knowledge How and Ability	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Episteme	6. 最初と最後の頁 1~9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/epi.2019.23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mizumoto Masaharu, Shun Tsugita, Yu Izumi	4. 巻 -
2. 論文標題 Knowing How and Two Knowledge Verbs in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ethno-Epistemology - New Directions for Global Epistemology	6. 最初と最後の頁 43-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SHANE RYAN, CHIENKUO MI, AND MASAHARU MIZUMOTO	4. 巻 -
2. 論文標題 Testimony, Credit, and Blame: Chinese and American Participant Responses to the Chicago Visitor Case	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ethno-Epistemology - New Directions for Global Epistemology	6. 最初と最後の頁 94-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Stephen Stich and Masaharu Mizumoto	4. 巻 -
2. 論文標題 Manifesto	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Epistemology for the Rest of the World	6. 最初と最後の頁 vii-xvi
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Masaharu Mizumoto	4. 巻 -
2. 論文標題 "Know" and Japanese Counterparts; "Shitte-iru" and "Wakatte-iru"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Epistemology for the Rest of the World	6. 最初と最後の頁 77-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kiyohide Arakawa and Masaharu Mizumoto	4. 巻 -
2. 論文標題 Multiple Chinese verbs equivalent to the English verb 'know'	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Epistemology for the Rest of the World	6. 最初と最後の頁 56-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Rose David、Machery Edouard、Stich Stephen、他42名	4. 巻 53
2. 論文標題 Nothing at Stake in Knowledge	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 No?s	6. 最初と最後の頁 224 ~ 247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/nous.12211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Cova Florian、Olivola Christopher Y.、Machery Edouard、他42名	4. 巻 -
2. 論文標題 De Pulchritudine non est Disputandum? A cross-cultural investigation of the alleged intersubjective validity of aesthetic judgment	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Mind & Language	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/mila.12210	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Masaharu Mizumoto
2. 発表標題 Alternative truth? - Linguistic diversity of the use of truth predicates and morality's role in it -
3. 学会等名 Truth Without Borders Workshop (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masaharu Mizumoto and Zhong Yuanyan
2. 発表標題 The linguistic and the Psychological Contributions to the Knobe Effect and the Limit of the Linguistic Effect
3. 学会等名 Agency and Intentions in Language 2 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masaharu Mizumoto
2. 発表標題 Pluralism about knowledge how and intelligence, and the fate of the intellectualism/anti-intellectualism debate
3. 学会等名 1st Asian Epistemology Network Online Meeting (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masaharu Mizumoto
2. 発表標題 Cross-Linguistic Disagreement in Philosophy
3. 学会等名 5th East-West Philosophy Forum (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 Masaharu Mizumoto
2. 発表標題 Knowledge and Truth Condition from the Perspective of Linguistic Diversity
3. 学会等名 International Conference on Language, Truth, and Epistemology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaharu Mizumoto
2. 発表標題 Linguistic diversity of the use of truth predicates and morality's role in it
3. 学会等名 Research Colloquium Metaphilosophy & Experimental Philosophy (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaharu Mizumoto
2. 発表標題 Knowing based on the testimony of passer-by or AI: A Cross-Cultural Study of AI-based Knowledge and Epistemic Responsibility
3. 学会等名 East West Philosophy Forum: The Epistemic Responsibilities of the Humanities (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaharu Mizumoto
2. 発表標題 Knowing emotion of others: A cross-linguistic and cross-cultural study
3. 学会等名 ASPP CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaharu Mizumoto
2. 発表標題 Essentially Nominal Criticism of Ulatowski 's Commonsense Pluralism about Truth
3. 学会等名 APA Central Division (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Edited By Masaharu Mizumoto, Jonardon Ganeri, Cliff Goddard	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 288
3. 書名 Ethno-Epistemology New Directions for Global Epistemology	

1. 著者名 Masaharu Mizumoto, Jonardon Ganeri, Cliff Goddard (eds)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 -
3. 書名 Ethno-Epistemology - New Directions for Global Epistemology	

1. 著者名 Masaharu Mizumoto, Stephen Stich, Eric McCready (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 295
3. 書名 Epistemology for the Rest of the World	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------